REPORT 特別展「ミロ展ースペイン巨匠の版画ー」

●記念演奏会
7月25日（土）午後7時～午後9時
●展示解説会
8月8日（土）午後2時～午後3時30分
●記念講演会「大地と空を結ぶ画家ジョアン・ミロ」
8月22日（土）午後2時～午後3時40分

田辺市立美術館で7月18日から8月30日にかけて開催した「ミロ展ースペイン巨匠の版画ー」は、類ない個性的な抽象表現によって20世紀の美術の世界を押し広げた画家、ジョアン・ミロ（1893～1983）の芸術を、生涯にわたって実験と探究が続けられた、ライフワークともいえる版画作品、約150点によって紹介する内容でした。ミロの表現について様々な角度から観ていただくために、会期中に三つの催しを企画して実施しました。

最初に行ったのは、展覧会が開幕して間もなくの7月25日に、閉館後の美術館エントランスホールを会場にして開催したコンサートです（写真上）。田辺市の出身で現在はスイスを拠点に活躍されているチェリストの山下泰資さんの理解と協力をいただいて、ミロと同じスペイン東北部カタルーニャ地方出身の偉大なチェリスト、パブロ・カザルスとその高弟ガスパール・カサドのレパートリーを軸に、20世紀に展開した無伴奏チェロの名曲によるプログラムを組みました。ミロの創作の根底にあったカタルーニャ地方の文化や、同時代の芸術の状況についての解説も交えながら進行し、楽曲の鑑賞とともに展覧会の内容についても理解を深めていただけるよう図りました。

会期半ばの8月8日には、展示解説会を開催しました。当日集った参加者のみなさんとともに、展示を順を追ってたどりながら、特にミロと同時代の詩人たちとの関係について、そしてそこから生れた詩画集のための作品に重点をおいて解説を行いました。

最後に行ったのが、8月22日に開催した、本展覧会の監修にもあたっていただいた、女子美術大学名誉教授の大森達次さんを招いての講演会「大地と空を結ぶ画家ジョアン・ミロ」でした（写真下）。ミロの作品に特徴的なモチーフを手掛かりに、その表現の源となったものを、ミロの残した言葉や時代背景の分析などとともに詳細に解説していただくことができ、会期の終盤を締めくくるのにふさわしい充実した内容となりました。

多様な側面をもったミロの芸術をよく伝えるためには、展示以外のこのような催しが不可欠だと考えていました。お力添えをいただいた方々にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

（学芸員　三谷　渉）

20世紀に生まれたチェロの名曲が演奏されました

作品のモチーフの分析から講演会は始まりました

絵画と出会う「この一点！」

館蔵品展「咲くー雑賀清子のスケッチより」
2016（平成28）年2月6日（土）～3月21日（月・祝）
熊野古道なかへち美術館

雑賀清子（1933～　）は油彩画とステンドグラスの制作を主とする作家だが、長年にわたって身近な自然を観察し、その記録を水彩や点描によるスケッチとして描き続けてきた。特に1980年代のはじめ頃からは田辺市中辺路町の自然を好んで取材し、そのスケッチの主としている。もともと発表することは意図せず、対象に自身の存在を重ね合わせながら描かれたスケッチは、それゆえに作家の資性や、対象に寄せるいつくしみが直接的に伝わるものとなっていて、どれもが親密な情感をたたえている。

数あるスケッチの中から、ここではこの「ORANGE vol.23」が刊行される頃にちょうど満開となる、キイジョウロウホトトギスを描いた水彩画を紹介しておきたい。キイジョウロウホトトギスはユリ科の多年草ホトトギス（杜鵑草）の一種で、キイジョウロウ（紀伊上臈）の名の通り、優美に（上臈は貴婦人の意）花が枝垂れる当地に特有の植物である。乱獲で希少となった清流の岩壁に自生するこの花を、雑賀はどこで目にしたのだろうか。周囲の空気や水の清々しさとともに、その姿が記録された。

（学芸員　三谷　渉）

雑賀清子《きいじょうろうほととぎす》
1985（昭和60）年
熊野古道なかへち美術館蔵

田辺市立美術館へのきもち⑬

私は1997（平成9）年の春から、まだ開館準備中だった熊野古道なかへち美術館の仕事に携わり、18年間勤務しました。1998（平成10）年の秋、当時人口約4,000人だった旧中辺路町にガラスで覆われた小さな公立美術館が開館しました。2005（平成17）年には市町村合併により田辺市立美術館の分館として新たなスタートを切り、現在に至ります。本年は合併10周年の節目を迎えていますが、自分にとっては早くも定年退職の年となりました。今、町立美術館の時からこれまで多くの方々にお会いできたこと、ご指導やご協力を頂きましたことに感謝の気持ちでいっぱいです。同時に、美術館とともに過ごした年月がほんの数年のことのように感じています。

合併によって田辺市では大小二つの美術館が一緒に運営されるようになりました。二館には共通する部分もありますが、同時にそれぞれが持つ特徴や役割もあると思います。両館ともに多くの方々にご利用いただき、その館ならではの楽しみ方や勉強の材料を見つけて頂けたらと願っています。

私自身が美術館の役目を考えるとき、いつも思い出す話が二つあります。一つは画家のご遺族からよくお聞きしたことで、「戦時中、食うや食わずの生活の中でも絵の注文は絶えなかった」という話です。もう一つは、戦渦を取材した人のレポートで、「コップ一杯に満たない貴重な水を、子どもたちは飲まないで死体の顔についた泥を落とすために使っていた」というものです。このような話は、人が生きるために何が必要かを教えてくれる例として大変貴重なものだと思います。人々の心が荒んだ状態にあっても、生き長らえるだけの食べ物があれば次に必要なのは、「より多くの食料」よりも文化、芸術、夢、人間の尊厳に繋がるものなのではないかと思います。美術館は、作品を通して真善美に触れることや、人間らしく生きてゆくための訓練、あるいはそのヒントに満ちた場所ではないかと思います。博物館法にうたわれているように、"教育的配慮のもと"で「夢ある公共サービスに努めたい」、また「教育普及には特に力を入れたい」と思いながら勤めてきましたが、なかなか十分には尽くせなかったという思いが残ります。

田辺市立美術館がより生きいきとした活動をされるよう心より願っています。市民や利用していく私たちの関わり方も運営に大きく反映します。二つの美術館をぜひ今後も大切にして頂けたらと思います。私自身は、これからはファンクラブの会員のような気持ちで田辺市のふたつの美術館を楽しみ、応援してゆきたいと思っています。

（前熊野古道なかへち美術館学芸員　山本　泰代）

熊野古道なかへち美術館ロビー　2013年秋

田辺市立美術館NEWS　ORANGE　Vol.23
編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館
発行年月日：平成27年10月1日

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770　FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390　FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

ORANGE vol.23をお読みいただきありがとうございます。本館は開催中の「色彩が魅せる世界」展が終わると改修工事に入り長期休館となりますが、分館は11月に美術館開放講座、来年2月からは雑賀清子展も行いますので、お楽しみいただければと思います。
お読みいただいてお気づきの方もいるかもしれませんが、4月から新しいスタッフが加わり、ますます頑張って活動していますので、ご期待ください。（担当m.m.）

田辺市立美術館NEWS　Vol.23

ORANGE

村井正誠《あるく子ども》　1985（昭和60）年

作品紹介　村井正誠《あるく子ども》　田辺市立美術館蔵

村井正誠（1905～1999）は23歳から27歳までの5年間をフランスで過ごし、この間に接した抽象表現を、自身の表現として生涯にわたって取りくんだ。その作品は日本の抽象絵画の先駆となり、一貫した人間を主題とする制作によって切り拓かれた芸術は、生前から高い評価を得てきた。
村井は油彩画を制作の主とした画家だが、様々な画材や技法に関心を寄せ、それが巧みに活かされた作品も数多く残している。《あるく子ども》でも水彩画特有の淡い効果と造形が、独特の抒情を生んでいる。
村井は晩年に「心が形と色と一体になった絵画、即ち精神と造形を同時に封じ込めた絵画。私の心と呼びたい創作を作品の中に残したい。」という言葉を残している。この小さな水彩画の中にも、まさに村井の子どもという存在に寄せた温かいまなざしと心が形象化されて留まっている。

（学芸員　三谷　渉）

色彩表現と近代絵画の展開

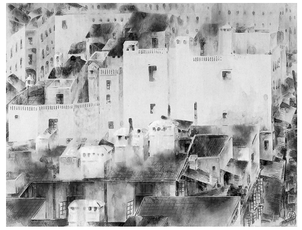
幕末から明治初期にかけて行われた西洋絵画の本格的な移入は、開国後のわが国の近代画壇に目まぐるしい変容と発展をもたらしただけでなく、それまで培われてきた日本絵画の色彩表現に大きな影響を与えました。油彩画では、わが国最初の官設美術家養成機関として設立された工部省工部美術学校で伝えられた西洋絵画技法がその後、明治後半の東京美術学校への西洋画科の設置や文部省美術展覧会の創設などを経て、大正期には官展に反発する在野の団体が生まれるなど、西洋の技術にとらわれない独自の絵画表現の可能性も探られるようになります。また、画家の内面に湧き起こるものを、現実の世界の形に寄ることなく、形態と色彩の構成によって表出しようとする抽象表現は、人間の表現という行為そのものや作品の物質的な性格を作品の内に取り込もうとする思潮へも結びつきました。

水彩画については、当初は油彩画制作の準備段階として導入された技法でしたが、独自の表現領域を持つ絵画であることを認め、これを専門に描こうとする画家たちが現れるようになりました。彼らの活動は、水彩画が紙に水で溶いた絵具で描くという従来からの日本絵画の技法との類縁性や、「自然」や「風景」を観察し、それを表出するという西洋的な絵画の意識の受容などともあいまって、一般の絵画愛好家の間にも流行を生み出し、後の「日本水彩画会」の結成や多くの水彩画家の輩出へとつながっていきました。また、水彩画を専門とはしなかったものの、淡い色彩とにじみによる繊細な表現ができるこの画材の特質を活かした優れた作品を残した画家や、不透明水彩絵具を効果的に用いて幻想的な内容の画面を即興的に描いた画家、水彩画のもつ軽快さや繊細さを抽象的な表現に用いた画家も多く登場するなど、多彩な広がりをみせました。

明治維新以後、西洋文化の急速な流入によって衰退の途をたどっていた日本画の世界は、アメリカから来日した東洋美術史家、哲学者であったフェノロサの指導によって新しい日本画の創造へと進み、息を吹き返しました。その後、日本美術院が設立されて多くの画家が登場するとともに、大正期には国画創作協会が創立されるなど、新しい日本画の創造に意欲的な多くの画家たちが、西洋絵画の表現を積極的に取り入れながら、構図や色彩の形式にとらわれない感覚や主観、画家自身の個性を表出させた作品を発表して、同時代を生きる画家たちにひとつの新しい方向を提示しました。その後、大正から昭和にかけて個性的表現の発露を重視する美術団体や画家が多く出現し、1948（昭和23）年、世界に通じる日本画の表現を切り拓くために結成された「創造美術」（現在の創画会）では、多くの画家が新しい時代の感性で描かれた花鳥画や風景画を制作し、発表していくなど、様々な個性を見せる作家を輩出しながら昭和から現代へと展開していきました。

（主任　辰巳　充）

白髪一雄《地祐星賽仁貴》　1961（昭和36）年
田辺市立美術館蔵



前田青邨《南の街（広州）》　1960（昭和35）年
（公財）脇村奨学会蔵（田辺市立美術館寄託）

三宅克己《信州松本郊外》　田辺市立美術館蔵

INFORMATION

田辺市合併10周年記念特別展 コレクションのあゆみⅡ　**色彩が魅せる世界　～油彩画・水彩画・近代日本画～**

会　　場／田辺市立美術館･熊野古道なかへち美術館
会　　期／平成27年9月19日（土）～11月8日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日（但し9月21日･10月12日は開館）
9月24日（木）･10月13日（火）･11月4日（水）

主　催／田辺市立美術館･熊野古道なかへち美術館
観覧料／各館：400円（320円）
学生及び18歳未満の方は無料
※（　）内は20名様以上の団体割引料金です。

★展示解説会を開催します。
田辺市立美術館：10月10日（土）／熊野古道なかへち美術館：9月26日（土）　いずれも午後2時から学芸員が行います。

田辺市立美術館の虫菌害対策

田辺市立美術館の収蔵品を作品保存の観点、すなわち材質の面からみると、近世の文人画や近代の水彩画、素描など、紙を支持体とする作品が大きな比重を占めていることが特徴としてあげられます。ご承知のように、紙は特に虫や菌（カビ）の被害を受けやすい材質です。一方で当館は新庄総合公園の一角に立地していて、周囲が植栽で囲まれており、これは美術館の好感度にたいへん貢献しているのですが、様々な虫を至近に集める要素ともなっていて、上記の収蔵品の特徴を考えると、けして良いことばかりではないのが実情です。当館の作品保存にとっては、自ずと虫菌害の対策が要となってきます。

従来、虫菌害対策の主となってきたのは、殺虫、殺菌の効果があって、かつ作品に損傷を与えない薬剤を成分とするガスを使った処置でした。当館でも2004（平成16）年まではこのガスを用いての虫菌害対策（燻蒸）を定期的に実施していましたが、このガスがオゾン層を破壊する物質として使用が制限されるようになったことや、作品を薬剤にさらすことを長期間にわたって繰り返す行為のリスクなどを考え、2005（平成17）年からは、館内の作品保存環境をチェックして、虫菌害の予防に重点をおいた対策をとり、燻蒸は必要が生じたときのみに行うよう方針を転換しました。

以後は例年6月と10月に環境調査を行い、温湿度の測定に始まり、塵埃や菌の量、空気が酸性やアルカリ性に傾いていないかどうかなどを検査し、下に写真を掲載したようなトラップを設置して、館内に侵入してきている虫の数や種類を調べています。

幸いこれまで燻蒸が必要な状況にはいたっていませんが、これは日頃からの当館スタッフ全員での虫菌害対策への取りくみが功を奏しているものだと考えています。虫の誘引源となるゴミなどを館内にためないこと、こまめな清掃によって清潔を保つこと、侵入してきた虫の早期発見と対処などです。そしてもう一つ重要なのは、ご来館のみなさんのご協力にも寄っていることです。館内での飲食をお断りしたり、生花などの持ち込みを禁じたりしているのも、大切に残されてきた作品を良好な状態で次世代に伝えていくための、こうした美術館の活動の一環として設けてある制限です。今後ともどうぞご理解とご協力をお願いいたします。

（学芸員　三谷　渉）

館内に侵入してきている昆虫を調べるトラップ
毎回およそ100ヶ所に設置して調査します

昆虫の侵入経路となる箇所に忌避剤を散布しています

田辺市立美術館（本館）の休館について

本年11月8日に終了する、田辺市合併10周年を記念した特別展「色彩が魅せる世界～油彩画･水彩画･近代日本画～」の後、田辺市立美術館（本館）は来年の3月末まで、一時休館いたします。来年、開館から20周年を迎えるにあたっての、施設設備の改修工事を行うためで、建物の外壁や展示室壁面の補修、照明設備の改修などが主な内容です。この間ご迷惑をおかけいたしますが、どうぞご理解をお願いいたします。リニューアルして開館20周年の節目を迎える美術館に、またみなさまがご来館いただけることを期待しております。

なお、熊野古道なかへち美術館（分館）では、本年11月21日に「美術館開放講座」を開催し、来年2月6日から3月21日にかけては、館蔵品展「咲く―雑賀清子のスケッチより」を催して、みなさまのご来館をお待ちいたしております。

（館長　岡本　美彦）

美術館開放講座

熊野古道なかへち美術館では開館間もなくから展覧会以外の様々な催しを実施してきました。現在「美術館開放講座」として定着している、この熊野古道なかへち美術館の活動をここで改めて振り返ってみたいと思います。

「美術館開放講座」の端緒となったのは開館（平成10年10月10日）の翌年夏に開催した「夏休み特別企画」です。当地中辺路（なかへち）にゆかりのある日本画家、野長瀬晩花と渡瀬凌雲を紹介する展示に合わせて中辺路の文化についての講演会を開催し、子どもたちを対象にした図工教室、チェンバロのコンサートを開催しました。前年の秋に開館した美術館に多くの人に気軽に来てもらい、親しんでいただけるよう、この「夏休み特別企画」は展示も含めすべての催しを無料で参加していただけるようにしました。翌年度も「夏休み親子開放講座」として夏休みに合わせたスケッチ教室、天体観測会、チェンバロのコンサートなどを開催しています。

現在の「美術館開放講座」の名称が使われるようになったのは平成14年度の映画鑑賞会「ベニスに死す」からです。ワークショップや講演会が展覧会と一体のものとして開催されることが増えたため、「美術館開放講座」は展覧会の企画からは離れた内容で、コンサートや映画の上映を通じて芸術鑑賞の機会をつくることが主となりました。

その中で、平成20年度以降は「美術館開放講座」の内容を「熊野」あるいは「熊野古道」と関係づけて開催する方向も定まってきました。特に平成24年度からは「森」を「熊野」のたたえる魅力の根幹をなすキーワードと考え、「"音の森"松田淳一ヴァイオリンコンサート」、「西陽子 箏コンサート～木に眠る声～」「石田多朗×勅使河原一雅　森羅万象の踊り」と昨年度まで連続してテーマに扱ってきています。

このように「美術館開放講座」の名称や開催の仕方には変遷がありましたが、美術作品の展示にとどまらない活動を行うこと、そしてそれを美術館への親しみへとつなげてゆくことは主眼として一貫しています。美術館が幅広い芸術に触れる機会を提供する場となり、みなさんの心を動かし、時には新たな思考をうながすきっかけともなるような「美術館開放講座」を今後も継続してゆきたいと思います。

今年度の美術館開放講座では昨年度に引き続き「森」をテーマにして、「ストリングラフィー糸が奏でる森のサウンド2015ー」を開催します。「ストリングラフィ」とは森の中で木と木の間に糸を張り、森全体を楽器にして演奏してみたいという思いから生まれたオリジナルの楽器とその演奏スタイルのことです。楽器は糸電話の原理を応用して絹糸の両端に紙コップを取り付けてつくられています。これを用いたワークショップとコンサートを開催します。ストリングラフィの奏でる音楽に合わせて聴こえてくる森の音を感じとり、自然界の持つ神秘的な力を共有する機会をつくりたいと思います。

（学芸員　知野　季里穂）

平成12年度に開催したスケッチ教室「描いてみようか?」

平成22年度に開催の種谷睦子マリンバコンサート「森の響き」

昨年度の石田多朗×勅使河原一雅　音楽と映像による作品「森羅万象の踊り」

情を喚起した現代社会を嘆く碑文とともに作品はありません。碑文の最後はこう締めくくられています。「太古のささやきに耳を傾け、山や森をつかさどる神霊に熱い思いを捧げてみよう」。

当地域の音楽や舞台芸術のメイン会場となっている紀南文化会館の前には、建畠覚造（1919―2006）の《MANJI》（1984年）があります⑥。新しい彫刻の又タイルを模索し、続け、日本の抽象彫刻の先駆者となった建畠のこの作品は、二つの卍（まんじ）が組み合わされた構成で、見る角度によって変容する形が、動きをも感じさせます。

今回は主な5つの作品に絞ってお伝えしましたが、まだまだ美術館の外のあちらこちらに素敵な作品があります。日常の風景の中にあるそれらの作品もまた、私たちの生活豊かなものにしてくれています。普段何気なく接しているかもしれない「作品」のことを、改めて見つめなおしていただけたら幸いです。

（学芸員　知野　季里穂）

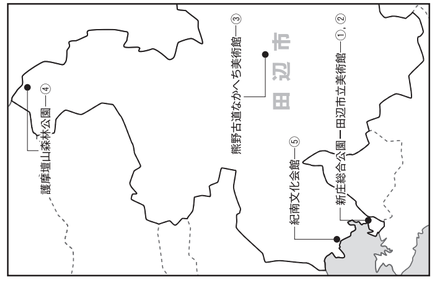
美術館の外に

田辺市立美術館は今年11月から来年3月末までの間、改修工事のために一時休館します。展示室で作品をご覧いただくことは出来ませんが、美術館の外で接することの出来る田辺市内の魅力的な作品をここで紹介したいと思います。

田辺市立美術館から一歩外へ出ると、目の前の新庄総合公園には音響彫刻家、増田感（b.1950）の《朝日の鐘》（1999年）があります①。この作品は「熊野古道」とスペインの巡礼道「サンティアゴの道」が姉妹道提携したことを記念して制作されました。同じ時間の太陽がそれぞれの道で朝日と夕日として見られることに着想し、実現はしていませんが、当初は対となる《夕日の鐘》をスペインに設置する計画もありました。

《朝日の鐘》から花の坂道を下り、道なりに進んで行くと、小清水渐（b.1944）の《クーフリンの小舟》（1997年）と《地の綠石の輩》（1997年）が見えてきます②。

小清水は1960年代後半から70年代にかけて勃興した日本の前衛芸術運動「もの派」の表現スタイルを代表する美術家で、木や石、鉄などを用い、素材そのものの訴えるカや、素材間の関わりを重視した制作が特徴です。

《クーフリンの小舟》は熊野古道なかへち美術館の裏庭に設置されています③。《地の綠石の輩》とこの《クーフリンの小舟》とは一組のもので、アイルランドの詩人、W.B.イエイツが日本の能に影響を受けて書いた戯曲、「鷹の井戸」が源になっています。生命の水を求めて漕ぎ出す《クーフリンの小舟》と大地の精霊たちを象徴する《地の綠石の輩》が一つの物語を紡ぎだします。

田辺市内の最も標高の高い地域、龍神にある護摩壇山森林公園には、彫刻に始まり、ランドスケープデザイン、舞台美術など幅広い活動を行って国際的に活躍した芸術家、イサム・ノグチ（1904―1988）の《新石器時代》（1982年）が設置されています④。自然と人との互恵に満ちていた古代社会を偲び、人間本来の自然な感